

体育授業を通した道德性の育成

所属コース 教育実践開発コース

氏名 河野寛太

指導教員 日野 克博 山内 孔

【概要】

本研究では、生徒の道德性の育成に焦点をあて、保健体育科の授業において体育と道德を関連付けた授業モデルを作成し、実践を通してそのモデルの効果と課題について検証した。授業モデルの作成にあたっては、「目標・ねらいの明確化」「学習過程の工夫」「教材の工夫」の視点から球技（バレーボール）の単元（8 時間）の授業を構想した。実践にあたっては、単元を通して道德性に関する「教師の意図的な働きかけ」と、単元のなかの時間に座学で道德的な授業を位置づけて生徒の道德的態度や道德的判断力を促す「問題解決的な学習」を展開した。そして、単元前後に、生徒の道德的心情や道德的判断力に関連した質問紙調査を実施したところ、多くの生徒で意識の変容が見られた。このことから、体育授業を通した道德性の育成を目指した授業モデルの適用可能性を確認することができた。

キーワード 道德的判断力 道德的態度 体育授業 授業モデル 道德的な授業

I 問題設定

現代の子どもたちを取り巻く社会環境は、常に変化が起きている。中央教育審議会教育課程部会審議経過報告(平成 18 年 2 月)では、「子どもの心と体の状況」のなかで、子どもの学ぶ意欲や生活習慣の未確立、後を絶たない問題行動、規範意識や体力の低下など、教育をめぐる社会状況には深刻なものがあると指摘している。また、国際比較調査でも、自尊感情や自分に自信のある子どもが少なく、学習に対して無気力な子どもが増えていることが危惧されている。これに加えて、人間関係を作る力が充分でないとの指摘もある。

このような状況から平成 31 年度より中学校においても道德が「特別の教科 道德」として教科化され、全面実施となった。このような背景から今まで以上に道德教育の必要性が高まっている。教育基本法第一条には、教育の目標として「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」と規定されている。この「人格の完成」の基盤となるのが道德教育である。新学習指導要領の第 1 章総則においても、道德性を養うことを目標とすることが示されており、学校における道德教育は、道德の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行い、各教科等と教科横断的な視点から道德教育に取り組んでいかなければならないことが述べられている。

保健体育科では、運動学習が中心になるものの、運動を通して、公正、協力、責任、参画、共生に関する態度や健康・安全に関する態度を育むことになっている。実際の体育授業においても、集団的な活動のなかで道德的態度や道德的判断が求められる場面は少なくない。保健体育科の授業を通して子どもたちの道德性を養い、育成していくためにはどのような授

業を展開していく必要があるかを考え、道徳性を育成する授業モデルの提案を行いたいと思ひ、本研究を構想するに至った。

II 体育と道徳教育の関係性についての先行研究

体育と道徳教育には大きな関係性があり、体育の授業で道徳性を養うことは効果的であると考えられる。中学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説 特別の教科 道徳「第 2 章道徳教育の目標」「各教科における道徳教育」においては、道徳教育推進上の配慮事項として、道徳と体育の関係性では、体育分野における様々な経験を通して、教科横断的に道徳性を養う必要があると解説されている。

石垣(2017)は、「身体を通して学ぶ」という視点こそが体育と道徳教育の接点となり、「身体的経験の重要性」が必要だと述べている。「特別の教科 道徳」の問題点として「考え、議論する」道徳の授業では分かっているが実行できないという根源的問題があり、そこには知的・心的な道徳教育の限界がある。これらを解決するためには、「身体的な経験」によって「わかる一できる」の乖離、すなわち「認識と実践」の間隙を埋めることが必要であると指摘している。また、松下(2017)は、「経験は言葉よりも多面的かつ潜在的であるゆえに、人間の経験は無自覚のうちに後続の自らの経験のなかに生きてくる。」と述べており、具体的な経験のなかで学ぶ(生活のなかで自然に身につけていく)道徳が必要であることを述べている。

BredeMeier and Shields(1986)は、スポーツ選手の道徳性に関する研究において相手と身体的接触をする程度が高いスポーツでは、選手でないものより道徳的発達水準が低く、また、当該スポーツへの参加期間が長いほど道徳的発達水準が低いということを報告している。スポーツへの深い関わりが道徳性や社会性、あるいは人間形成に結びつくわけではなく、多様なアプローチや正しいモデルの提示が道徳的発達には必要であることを述べている。

これらのことから、心と体を一体としながら運動の経験を通して学習する保健体育科の授業では、体育と道徳性の関係が強くなると考えられる。しかし、体育授業をすれば自然と道徳性が身に付くというものではないと考える。保健体育科の授業では、運動の技能を習得させることが中心的な課題になるが、体育と道徳の関連性や道徳性を意識した体育授業を実践することは、生徒の道徳性の育成の視点から意義深いと考えた。そこで本研究では、球技(バレーボール)の単元において、集団でのかかわりと自己の振り返りを通して生徒に道徳性について意識させる授業モデルの提案を行うことにした。

III 研究の目的

本研究では、道徳性の育成を目指した保健体育科の授業モデルを作成し、実践を通して生徒の意識の変容を確認し、道徳性の育成を意図した授業モデルの効果と課題について検討することにした。

本研究における道徳性とは、中学校学習指導要領(平成 29 年度告示)解説「特別の教科 道徳」の道徳教育の目標に基づき、「物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことと捉えることにした。また、本単元の球技(バレーボール)の指導内容に関連して、生徒の道徳的態度と道徳的判断力の 2 つの観点から生徒の意識の変容をみることにした。

IV 研究の方法

(1) 研究期日

2020年11月10日から2020年12月17日の期間に、球技(バレーボール)の8時間単元の授業を実践した。

(2) 研究対象

実践は、愛媛県にあるH中学校の生徒を対象に行なった。対象生徒は3年生男子の2授業で計64名である。生徒の実態としては、体育の授業には積極的に取り組み、運動意欲は高い傾向にあった。生徒同士のコミュニケーションは良好で、お互いに考えや意見を伝え合う関係性は十分に育まれていた。バレーボールの学習は1年生の時に経験しており、サーブやレシーブ、トス、スパイクといった基本的な技能はある程度身に付いている状態だった。

(3) データの収集方法

本研究では、生徒たちの道徳性の変容をみるために、単元前後に質問紙調査を実施した。その調査は、新学習指導要領解説(特別の教科 道徳編)を参考に、道徳性に関連した学校生活に関する項目(10項目)と道徳性に関連した体育授業に関する項目(10項目)で構成し、それぞれの質問について5件法で回答させた。表1は、それらの質問項目を示している。

また、生徒の具体的な意識の変容をみるために、単元前後に自由記述による調査も実施した。さらに、授業中の生徒のゲームの様子や学習態度、発言などについてiPadに撮影して、特徴的な行動を観察記録することにした。

表1 質問紙調査における質問項目

学校生活に関する質問項目	質問内容と対応した価値項目
Q1 何事にも自主的に考え判断し誠実に実行して結果に責任を持つことができている。	A 自主,自律,自由と責任
Q2 高い目標を持ち困難や失敗を乗り越えてやり遂げることができている。	A 希望と勇氣,克己と強い意志
Q3 思いやりの心を持って人と接し感謝の気持ちを伝えることができている。	B 思いやり,感謝
Q4 時と場合に応じた適切な言動をとることができている。	B 礼儀
Q5 友達と励まし合い高め合い異性についての理解を深め人間関係を構築できている。	B 友情,信頼
Q6 様々な個性や立場を尊重し謙虚に他者から学び自らを高めることができている。	B 相互理解,寛容
Q7 きまりの意義を理解しそれらを守ろうとすることができている。	C 遵法精神,公德心
Q8 誰に対しても公平に接し差別や偏見をしないように努めることができている。	C 公正,公平,社会正義
Q9 学校や学級の一員としての自覚を持ち自己の役割や責任を果たそうとすることができている。	C よりよい学校生活,集団生活の充実
Q10 自らの弱さに気づきそれらを克服しより良く生きようとする事ができている。	D よりよく生きる喜び

体育授業に関する質問項目	質問内容と対応した価値項目
Q1 授業では自主的に考えそれらを責任持って行動することができている。	A 自主,自律,自由と責任
Q2 授業では高い目標を設定し失敗しても諦めず取り組むことができている。	A 希望と勇氣,克己と強い意志
Q3 授業では他者に対して「ありがとう」や「ごめんなさい」ということができている。	B 思いやり,感謝
Q4 授業では授業前後や試合前後できちんと挨拶することができている。	B 礼儀
Q5 練習や試合では友達を尊重し信頼して授業に取り組むことができている。	B 友情,信頼
Q6 授業では友達の見解を大切にしながら自分の意見を伝えながら活動することができている。	B 相互理解,寛容
Q7 授業ではきちんと競技のルールを守りプレイすることができている。	C 遵法精神,公德心
Q8 授業では誰とでも仲良くし勝っても負けても素直に認めることができている。	C 公正,公平,社会正義
Q9 集団の一員としての自覚を持ち課題の解決に向け積極的に意見を出す事ができている。	C よりよい学校生活,集団生活の充実
Q10 自ら苦手なことについて克服しようとし自分の良いプレイに対して喜ぶことができている。	D よりよく生きる喜び

IV 研究の実践

(1) 授業モデルの構想

図1は、球技（バレーボール）の8時間の授業内容を示している。単元構想にあたって、道徳性の育成に焦点をあて、表2に示す3つの視点から授業モデルを構成した。図の①～③は、その工夫したポイントを示している。その詳細について、以下に述べていく。

	はじめ	2			なか	おわり			単元後
	1	3	4	⑤	6	7	8		
10	オリエンテーション (今回の授業の道徳的 テーマについて触れ る)	ランニング、ストレッチ、ねらいの確認			③ (本研究の主な実践) 体育教材を活用した 道徳性について考える 授業 (教室での授業)	ランニング、ストレッチ、ねらいの確認		開会式	アンケート分析
20	① 事前アンケート	ボールに慣れる運動 パス練習 ・オーバーハンドパス ・アンダーハンドパス	② ゲーム (スキルトレーニングを活かす)	② チームでの話し合い 目標設定		個人、チームでの 課題練習	② 大会(ゲーム)		
30		サーブ練習 ・アンダーハンドサー ビス ・フロッターサービス		リーグ戦		チームでの話し合い 練習			
40	試合(ゲーム)	トス、スパイク練習	ゲームを通してチームでの 課題練習	リーグ戦		大会に向けての練習	授業の振り返り (閉会式)		
50		本授業の振り返りと次回の授業内容の確認							
	目標設定			教材を使用した 道徳的な授業			問題解決的な 学習		

図1 単元構造図(バレーボール)

表2 授業モデルにおける3つの工夫点

① 目標・ねらいの明確化
② 学習過程の工夫
③ 教材の工夫



図2 授業風景

① 目標・ねらいの明確化

本実践では、単元の目標として「みんなが楽しめるバレーボールを行う」を設定した。この目標を設定した意図は、運動が得意な生徒や苦手な生徒に関わらず全員が協力し、チームに貢献するなかで道徳性の大切さについて考えることができるような授業にしたいという筆者自身の強い思いがあった。この目標を単元の1時間目に生徒に提示し、目標を達成するためにはどのような取り組みや手立てが必要であるかを考えさせ、意識付けを行った。生徒からは「得意な人が中心となって苦手な人に教え合いながらみんなで楽しめるようにしたい」や「苦手な人も活躍できる場を作っていきたい」といった考えが見られた。なお、この単元目標は、授業のなかでも適宜取り上げ、生徒の意識を「みんなが楽しめるバレーボール」へと方向付けるようにした。

② 学習過程の工夫

単元構想では、第1～4時間目を「はじめ」、5時間目を「なか」、第6～8時間目を「おわり」と位置づけた。

「はじめ」(1～4時間目)の授業では、バレーボールの基本的な技術を習得するためにチーム練習や試合の場面を多く取り入れた。ここでは、毎授業の導入で目標やねらいを意識さ

せることを行い、技能に関する助言はするものの、あえて教師から道徳性に対する働きかけを行わなかった。チーム内には、運動が得意な生徒と苦手な生徒が混在しており、生徒の様子を注意深く観察し、生徒のなかで生じている課題や問題点を把握することにした。

「なか」(5 時間目)の授業は、教室で座学として実施した。この時間は、「はじめ」の段階で実際に起きた生徒たちの道徳的な課題を取り上げ、本単元の目標である「みんなが楽しめるバレーボールを行う」について、生徒個々に振り返らせ、単元後半の授業に向けてどのような行動をとればいいのかグループで議論させた。本授業では、特定の価値観を押し付けるのではなく、生徒自身が主体的に「考え、議論する」ことができる授業を重視して行った。

「おわり」(6~8 時間目)の授業では、リーグ戦やトーナメント形式の大会を行った。ここでは、「なか」の時間に設定した目標を達成できるよう生徒たちに各授業の導入でホワイトボードを使用し、目標を可視化することで意識付けを行った。各授業の終了時には振り返りの時間を設け、目標が達成できていたかチーム毎に確認させた。

このように「やって、考えて、またやってみる」という学びの過程を位置づけ、生徒自身が自己の学習活動を素材にして道徳性について思考し、その後、経験を通して道徳性の大切さを実感する学習過程を構成するようにした。

③ 教材の工夫

「なか」(5 時間目)の授業では、「はじめ」の授業部分で起きた事象を実際に教材として使用することにした。それは、身近な経験をもとにふりかえることで、生徒自身が具体的なイメージをもちやすく、そして、自分たちのことに置き換えて事象のことを思考することができると考えたからである。ただ、具体の事例をそのまま取り上げると、現実性が高く、一部の生徒にとって自己のこととして不快な気持ちや不愉快な思いになることを避けるため、種目をバスケットボールに変え、内容を慎重に吟味して図3のような文章教材を作成した。

「体育の本当の目的とはなんだろう？」 ←

事例1 ←

体育のバスケットボールの授業でNチームは、勉強が苦手であるがスポーツ万能でバスケットボール部のエース的存在であるA君、勉強や運動をなんでも卒なくこなせるB君、スポーツ自体は得意であるがバスケットボールが苦手なC君、勉強はとても得意だがスポーツ全般が苦手なD君の4人のチームです。 ←

負けたら終わりのトーナメント形式の試合でNチームは、A君とB君の2人のみでバスを繋ぎ、シュートを決めて点を取り多くの試合に勝っています。A君は自分が点を決めないといけないという使命感を持っておりB君はA君と活躍するために精一杯頑張ってチームの勝利のために貢献しようと2人で点を決めています。C君は自分がプレーに参加するとミスをして足を引っ張ってしまうため積極的に参加できていません。D君はスポーツが苦手なため、最初からやる気があまりなくミスをするとう怒られるのが嫌なため、楽しむということを諦めて参加しないことでチームの勝利に貢献しようとしています。A君、B君はチームが勝って嬉しいと思っています。C君、D君の二人もチームの勝利を喜んではいますが全員それぞれ何か違和感を感じており、バスケットボールを楽しめるバスケットボール」を行っていかうと言われていきます。Nチームはこのままトーナメントを続けたので良いのでしょうか? ←

Q あなたは目標である「全員が楽しめるバスケットボール」を実現するためにはどうすれば良いと考えますか。AB君の立場CD君のそれぞれの立場になって考えてみよう。 ←

図3 使用した教材

この教材では、特徴の異なる4人の生徒でチームを構成している。A, Bは運動が得意な生徒で、C, Dは運動が苦手な生徒の例である。それぞれにチームのことを考えゲームに参加しているものの、バスケットボールが楽しめていない状況に一人一人が違和感を感じており、それぞれの立場になって「みんなが楽しめる」ための方策を考える内容になっている。この教材では、正しい解答があるわけではなく、ねらいとして、特定の価値観を押し付けず、さまざまな立場や考えの人がいることに気付かせ、チームの目標達成に向けてどうすることがいいかを思考させることに主眼を置いている。

授業は、まず一人一人で自分が思う適切な判断を考え、その後全体で議論を行い、道徳的態度や道徳的判断について思考させた。また、教材では図4のパワーポイントを用いてABCDそれぞれの行動や心情を理解できるように可視化を行った。これを用いることにより、自分自身と登場人物を重ね合わせ「自分だったらこうしたいな」というようにイメージしやすいようにした。授業の後半部分では、本教材で思考したことをチームで話し合い、さまざまな考えを受容しながら、今後の授業での目標についてマンダラチャートを用いて行った。これを用いることで、目標や行動を可視化し、グループでの話し合いが活発になり、具体的な思考を促す効果を期待した。

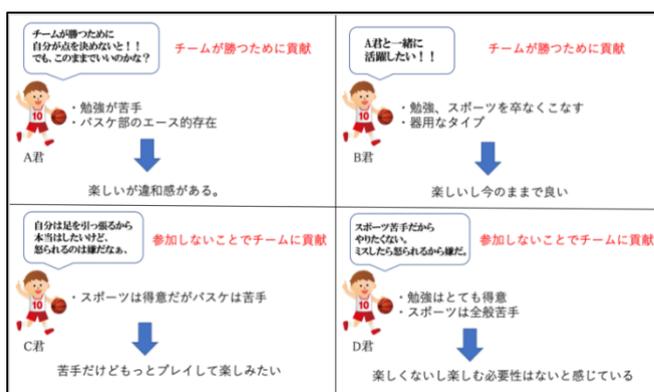


図4 教材の工夫

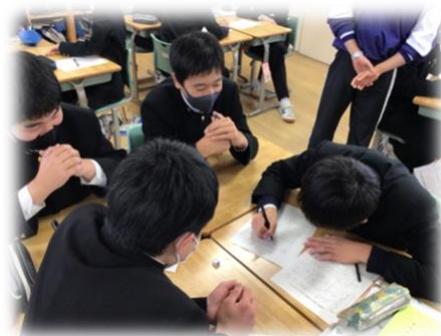


図5 授業風景

V 研究の結果と考察

(1) 道徳性に関する生徒の意識の変容（質問紙調査）

単元前と単元後に道徳性に関する質問紙調査を実施した。表3は「体育授業に関する調査」を示している。

「体育授業に関する調査」では、全ての質問項目において単元後の平均値は向上した。特に「Q1 授業では自主的に考えそれらを責任持って行動することができている。」「Q2 授業では高い目標を設定し失敗しても諦めず取り組むことができている。」「Q9 集団の一員としての自覚を持ち課題の解決に向け積極的に意見を出すことができている。」の3項目で有意差が認められた。これらは、「自主, 自律, 自由と責任」、「希望と強い勇気, 克己と強い意志」、「よりよい学校生活, 集団生活の充実」に関連する項目である。これらの変容の要因として、生徒が授業内で道徳的な事象を自らが体験し、教室での「考え, 議論する」授業を通して自己の道徳性を見つめ直すことができたことがあげられる。さらに、その後の授業で、他者との関わりを通して集団の意義や集団の中での自分の役割や責任を自覚することができたと考えられる。なお、他の項目で有意差は認められなかったものの、どの項目も単元前後

で高い値で推移しており、道徳性に関する意識は高く維持されたと考える。

表3 「体育授業に関する調査」の結果

体育授業に関する質問項目	1項目 5件法	11/10(n=64)	12/17(n=64)	t値
	n=64	単元前(標準偏差)	単元後(標準偏差)	
Q1 授業では自主的に考えそれらを責任持って行動することができている。		4.4(0.72)	4.6(0.56)	-2.10*
Q2 授業では高い目標を設定し失敗しても諦めず取り組むことができている。		4.3(0.71)	4.5(0.64)	-3.45**
Q3 授業では他者に対して「ありがとう」や「ごめんなさい」ということができている。		4.6(0.68)	4.7(0.55)	-1.29
Q4 授業では授業前後や試合前後できちんと挨拶することができている。		4.5(0.69)	4.6(0.52)	-1.31
Q5 練習や試合では友達を尊重し信頼して授業に取り組むことができている。		4.6(0.66)	4.7(0.47)	-1.43
Q6 授業では友達の見解を大切に自分の意見を伝えながら活動することができている。		4.4(0.65)	4.5(0.59)	-1.64
Q7 授業ではきちんと競技のルールを守りプレイをすることができている。		4.5(0.64)	4.6(0.54)	-1.18
Q8 授業では誰とでも仲良くし勝っても負けても素直に認めることができている。		4.5(0.69)	4.6(0.58)	-1.22
Q9 集団の一員としての自覚を持ち課題の解決に向け積極的に意見を出すことができている。		4.2(0.69)	4.7(0.48)	-5.66**
Q10 自ら苦手なことについて克服しようとし自分の良いプレイに対して喜ぶことができている。		4.5(0.75)	4.6(0.55)	-1.53
				*p<0.5 **p<0.1

表4は「学校生活に関する調査」の結果を示している。全ての質問項目において平均値は向上していた。特に、「Q1 何事にも自主的に考え判断し誠実に実行して結果に責任を持つことができている。」「Q2 高い目標を持ち困難や失敗を乗り越えてやり遂げることができている。」「Q3 思いやりの心を持って人と接し感謝の気持ちを伝えることができている。」「Q4 時と場合に応じた適切な言動をとることができている。」「Q9 学校や学級の一員としての自覚を持ち自己の役割や責任を果たそうとすることができている。」の5項目で有意差が認められた。

これらの項目は、学校生活のことについて尋ねており、新たに「思いやり,感謝」、「礼儀」といった項目でも有意差が認められた。これらの要因として、体育授業で思考と実践を通して学習したことは、体育の授業だけでなく、学校生活の場面でも道徳性を意識する必要性を感じたからだと推察する。

表4 「学校生活に関する調査」の結果

学校生活に関する質問項目	1項目 5件法	11/10(n=64)	12/17(n=64)	t値
	n=64	単元前(標準偏差)	単元後(標準偏差)	
Q1 何事にも自主的に考え判断し誠実に実行して結果に責任を持つことができている。		4.2(0.60)	4.4(0.56)	-2.73**
Q2 高い目標を持ち困難や失敗を乗り越えてやり遂げることができている。		4.2(0.81)	4.6(0.53)	-3.24**
Q3 思いやりの心を持って人と接し感謝の気持ちを伝えることができている。		4.4(0.66)	4.6(0.61)	-2.01*
Q4 時と場合に応じた適切な言動をとることができている。		4.1(0.77)	4.3(0.62)	-1.99*
Q5 友達と励まし合い高め合い異性についての理解を深め人間関係を構築できている。		4.5(0.69)	4.6(0.58)	-1.53
Q6 様々な個性や立場を尊重し謙虚に他者から学び自らを高めることができている。		4.4(0.72)	4.5(0.59)	-1.34
Q7 きまりの意義を理解しそれらを守ろうとすることができている。		4.4(0.66)	4.7(0.51)	-2.43
Q8 誰に対しても公平に接し差別や偏見をしないように努めることができている。		4.4(0.66)	4.5(0.64)	-0.75
Q9 学校や学級の一員としての自覚を持ち自己の役割や責任を果たそうとすることができている。		4.2(0.78)	4.6(0.58)	-3.44**
Q10 自らの弱さに気付きそれらを克服しより良く生きようとする事ができている。		4.1(0.90)	4.4(0.70)	-1.78
				*p<0.5 **p<0.1

(2) 道徳性に関する生徒の意識の変容 (自由記述)

生徒の具体的な意識の変容をみるために、単元前後での自由記述の内容を分析した。単元前は、この授業に対する期待やニーズを、単元後は今回の授業を振り返った感想を自由に記述させた。図6は、その内容を分類した結果である。

単元前は、「ジャンプサーブができるようになりたい」や「バレーボールを楽しみたい」

など、授業の内容や技術向上に関する記述が 63% (39 名), 「バレーボールはコミュニケーションが大切なので、仲間とたくさん話し合いを行う」や「自分だけではなくチーム全体を見て、それぞれの個性を生かせるようにしたい」などの道徳性に関する記述が 37% (23 名)であった。これに対し、単元後の記述では、「授業を通してバレーの技術が向上し、バレーが上手くなれたと思う」や「パスがたくさん繋がって楽しかった」など授業内容や技術向上に関する記述が 35% (22 名), 「友達と笑い合ったり悔しがり合ったりして、個々の力が高まったりチームの絆が深まった。また、バレーを通して団結力が高まった」や「勝利よりも楽しむことがチームの仲を深められたと感じ、声を掛け合うことでより充実したバレーになった」などの道徳性に関する記述が 65% (40 名)見られた。単元前の記述では授業内容や技術向上に関することが多くみられたが、単元後の記述では道徳性に関する内容が多くなっていた。このことから、単元を通して道徳性に対する意識の向上や必要性を実感する生徒が増えたのではないかと考える。また、実際に授業で生徒の様子を観察する中で、生徒たちの道徳性の意識の変容が感じられた。具体的には、授業前半では練習や試合を行なっていくなかで、他者がミスを行うと責任を押し付けあっている場面が見られた。5 時間目の「なか」の授業で道徳性について考え、その後の授業後半では、チーム全体で温かい声の掛け合いやミスをカバーし合うプレーが多く見られるようになった。また、ルールをしっかりと守りながらチームで協力しようとしている場面も多々見られた。しかし、本研究の結果が一時的な変化である可能性も考えられるため、今後も長期的・継続的な検証が必要であると考えられる。



図 6 記述内容の割合の変化

さらに、個々の生徒の記述の変容にも着目した。生徒 A は、単元前と単元後で道徳性に関する記述を行っていたが、単元後ではより道徳性に関する思考が深化した内容であった。単元前は、「友達と協力して助け合いや支え合いを意識したい」と記述し、単元後は、「コミュニケーションを身につけるのは普段の生活から意識しないと難しい。日頃から仲間を大切にしたい」という記述の変化であった (図 7 を参照)。

生徒 A は、「はじめ」の授業から道徳性に対する意識があり、授業においても、普段から他者への声かけを積極的に行っていた。また、5 時間目の道徳的な授業でも、真剣に授業に取り組み、この授業の振り返りでは「声かけで前向きな気持ちを大切にして、自分もチームの一員である自覚を持ってバレーを楽しみたい」と記述していた。このように、生徒 A は単元を通して道徳性に対しての意識が継続して授業に取り組んでいたと考えられる。

○バレーボールの授業を通して身につけたいことや目標を自由に記入してください。

友達と協力して他人に全てまかせたり、自分で全てしようとせず、助け合い支え合いを意識したい。

○バレーボールの授業を通しての感想を自由に記入してください。

スポーツはコミュニケーションが大切だし、それをマネージャーと身につけるのは普段の生活からでないと思わしかった。日頃からなにも通しても仲間を大切にしたい。

図7 生徒Aの単元前後の記述内容

生徒Bは、単元前は「1試合で5得点以上」と授業内容や技術向上に関する記述であったが、単元後は「仲間との協力の難しさや仲間との高め合いを楽しめた」という道徳性に関する記述が書かれていた（図8を参照）。

生徒Bは、単元前は、道徳性の意識付けはされておらず、バレーボールの技術向上についての意識が強くあった。「はじめ」の授業では他者に対する声かけは少なく、自分の技術の向上のために授業を行なっている様子が観察された。しかし5時間目の道徳的な授業で道徳性の必要性について考え、積極的に意見を述べていた。この授業の振り返りでは「今までは自分が上手くできればいいと思っていたが、いろんな立場の人の気持ちを考えて協力しながらプレーしたい」と記述していた。単元後半の授業では、生徒Bはチーム内での役割を果たしたり、チームで勝つために積極的に声を出して授業に取り組むなどの道徳性の意識の変容が確認できた。

○バレーボールの授業を通して身につけたいことや目標を自由に記入してください。

1試合で5得点以上

○バレーボールの授業を通しての感想を自由に記入してください。

仲間との協力の難しさや、仲間との高め合いを大いに楽しめたと思います。

図8 生徒Bの単元前後の記述内容の変化

VI 研究の成果と課題

(1) 授業モデルの成果

本研究では、生徒の道徳性を育成することをねらいとした授業モデルの提案を行った。主に「目標・ねらいの明確化」「学習過程の工夫」「教材の工夫」の視点から授業を構想した。実践を通して、次のことが確認された。

1点目の「目標・ねらいの明確化」については、単元を通して「みんなが楽しむ」という目標を提示し、具体的場面における道徳的な態度や道徳的判断を生徒に思考させることにした。体育授業では、技能のできばえやゲームの勝敗に生徒の意識が集まり、特に運動が苦手な生徒にとって消極的なかわりになる傾向がある。本実践では、「みんなが楽しむ」ことを目標として明確に示し、そのことを単元の最初から最後まで継続して意識させた。その結果、苦手な生徒に対してチーム全員がアドバイスや技術指導を行ったり、試合で他者がミスをして「次頑張ろう、もっとこうすると良いよ」「俺がカバーするから大丈夫だよ」などの声かけがどのチームで見られるようになった。そのことで、授業全体の雰囲気も良くなった。この単元では何を学習するのか、実現させたい授業の姿（ゴールイメージ）を具体的に示すことで、生徒の意識を方向付けることができたと考えられる。

2点目の「学習過程の工夫」については、「やってみて、考えて、またやってみる」という実践と思考を往還する単元構成にして授業を実践した。教師から道徳的な態度や判断の必要性を伝えるのではなく、単元前半の授業をもとに自己の言動に対する課題や他者との関わりを振り返らせることで道徳的な態度や判断が必要であることに気づかせることにした。単元後半の授業で「みんなが楽しむ」という目標にむかって意識を共有化させるようにした。その結果、生徒からは、「道徳性とは具体的に何をしたらいいのかわからなかったけど、人それぞれ違う考えがあってそれを尊重していきたい」といった記述もみられた。経験を通して考え、考えたことを実践することで道徳性の大切さをより強く実感することができたと考えられる。

3点目の「教材の工夫」については、授業で実際に起きた事象をもとに道徳性について考える教材を作成し、教室で実践した。生徒たちは与えられた教材（題材）についてさまざまな立場から思考し、他者と議論することで、価値観の違いや他者の思いを受容することの必要性に気づき、道徳的な態度や判断力の大切さを意識するようになっていた。体育の授業は一般に実技を中心に行われるが、教室の座学として実施したことで、運動場面での道徳的な態度や判断についてじっくりと考えることができ、そのことが、単元後半の態度変容にも影響したと考えられる。単元後半の授業では他者の考えを否定することなく、お互いの考えを出し合い、どのようにしていくことで目標を達成できるのかを実践する学習態度が見られた。

これらのことから、本実践で工夫した3つの視点は、生徒の道徳性の育成に寄与したと考えられる。道徳教育の重要性が増すなか、体育と道徳教育とを関連付けて指導することの意義は十分にあると考えたが、その適用可能性を確認することができた。運動をすれば自然と道徳性が身に付くのではなく、本実践のように「教師の意図的な働きかけ」や「問題解決的な学習」のもと道徳性の育成をねらいにした授業を展開することで、生徒の意識変容が期待できる。

(2) 研究における課題

一方、本研究の課題もいくつかあげられる。1点目は、学習指導要領に沿った指導内容の位置付けである。今回の実践では、道徳性の育成を重点とした授業を展開した。しかし、学習指導要領では「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」についてバランスよく指導することが示されている。特に体育授業では、運動学習が中心になることから他の目標の達成度についても検証していく必要がある。2点目は、年間を通した指導計画の充実である。今回の実践では、1つの単元で道徳性の育成を目指した。しかし、

道徳性の育成は、学校教育の全体や教科横断的な指導を通して育成していく必要がある。カリキュラム・マネジメントの視点から、今回の実践をどのように位置づけ、他教科、特別活動、学校行事等と関連付けるといいか検討していく必要がある。3点目は、より正確な分析方法の必要性である。今回、数値で測ることが難しい道徳的態度と道徳的判断力について質問紙調査により変容を図った。質問項目については、学習指導要領を参考にして作成を行ったが、これらが道徳性の変容を図る要因として適切であるかを今後も検証していく必要がある。

VII 研究の今後の展望

本研究の今後の展望として、本実践の取組は「豊かなスポーツライフの実現」をめざす保健体育科の目標につながるものであると考える。また、「みんなが楽しむ」という道徳的な態度や判断は、学校生活だけでなく今後の生きる力にもつながるものである。今回は、中学校の1事例による取組であったが、保健体育科の授業改善の取組としては意義深いと考えている。運動の得意・不得意に関係なく、どの生徒にとっても運動の楽しさを実感することができる授業づくりについて、今後も継続して取り組んでいきたい。

引用・参考文献

- 石垣健二(2008).「道徳教育としての体育」序説 道徳教育論批判及び身体的経験の必要性, 体育・スポーツ哲学研究 30-1, 27-45
- 高橋建夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖(2006).『体育科教育学入門』, 創文企画
- 友添秀則(2008). 体育における人間形成に関する研究-A Study on Character Building in School Physical Education
- 友添秀則(2010). JTPE 掲載論文にみる体育における道徳学習と責任学習の研究動向, スポーツ教育学研究, Vol29, No. 2, pp1-16
- 米津光治(2017). 日本の学校体育の変遷と課題-History and Future Tasks of Japanese Physical Education
- 渡辺弥生(2014). 学校予防教育に必要な「道徳性・向社会的行動」の育成
- Shield, D.L. and Bredemeier, B.L (2007). 「スポーツの道徳性研究の進歩」(1)
- 体育科教育(2017). 12月号, 大修館書店
- 文部科学省(2006). 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会審議経過報告
- 文部科学省(2018). 中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説「特別の教科 道徳」
- 文部科学省(2018). 中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 保健体育編

謝辞

本研究執筆に当たり、指導教員として、研究を中心にご指導頂いた日野克博先生、実習を中心にご指導頂いた山内孔先生、並びに、さまざまな授業で新たな知見を下された教職大学院の先生方に心よりお礼申し上げます。

本研究を進めるにあたって、協力して頂いたH中学校の先生方、生徒の皆さんに心より感謝し、お礼申し上げます。また、先輩、後輩、同期との出会いは刺激的なものであり、人生においても大きな意味を成すものとなりました。大学院生活を通し、出会えた全ての人に感謝申し上げます。2年間本当にありがとうございました。